

土佐湾ホエールウォッチング育成調査事業（概要）

漁 業 科 石 井 功

平成6年度から始まった当事業については2年目にあたり、昨年と同様別途報告書（既報）のため以下その要旨を述べる。

1. 昨年度と同様、土佐海洋丸による目視調査とアンケート調査を実施し、ニタリクジラの分布と来遊量に関する情報の収集を行った。
2. 今年度、鯨の追尾等で改良を加えるため、土佐海洋丸のアップブリッジ上に見張台を設置し、広い視野と高い視点を確保して探索追尾能力の向上をはかるとともに、第1回（春季）調査時に元捕鯨船甲板員の方に操船方法についての指導を受け、より確実な調査の実施に努めた。
3. また沖合域の情報を収集するため調査海域を距岸15マイルから20マイルに拡大し、さらに調査海域の北限についても興津岬から大津岬まで延長して調査を行った。
4. アンケート調査については、配布用紙の質問事項を改訂し、より精度の高い情報が得られるよう改善するとともに、昨年度に引き続きホエールウォッチング推進協議会の協力のもとに、地元漁業者の方々に協力依頼を継続し、昨年度の約2倍にあたる1147日隻分の出漁に関する情報を得ることができた。
5. これらの調査の結果分布密度の季節変動については、本年度も昨年と同様春季に最も高い値が得られ、本海域のニタリクジラの来遊盛期は春であることが示された。これを受け、本年度は目視調査結果にライントランセクト法を適用し、来遊盛期における個体推定を行い、来遊頭数53頭（ $CV = 0.58$ ）という値を得た。
6. 春季調査は6月中旬（13～16日）に実施し、2年間の目視調査を通じて最も多い11群17頭のニタリクジラを発見した。

一方、昨年目視による発見の多かった夏季調査では本年は1群2頭の発見にとどまり、分布密度

の低下が予想された。冬季調査では6群11頭と春季について多くの発見がなされた。

アンケート調査や地元漁業者の話では、これらの数字がかならずしもその時期全部を代表しておらず、日による鯨の移動が頻雑な様で、これらのデータ値の積み重ねや、別の手法による解析が必要と思われる。

7. 目視調査による発見の多かった春季（6月）および冬季（2月）においては、鳥山や小魚のナブラが多く見受けられ、その周辺で発見された群れには摂餌行動が報告されている。

これらの点から、ニタリクジラの本海域への来遊分布は餌生物分布と密接な関係があるものと推察される。

8. 昨年論じられた系群については、本海域から他海域への出入りが予想され、DNA比較や個体レベルでの出現移動状況把握が必要。

